

藍澤南城における杜甫

村山 敬三

一 序

藍澤南城（一七九二—一八六〇）は越後柏崎に學塾三餘堂を開いた儒者であるが、生涯にわたって詩作を續けた詩人でもある。その作品はほぼ年代順に記された『三餘集』全十七卷^(一)としてまとめられている。また、その『三餘集』から三百六十編ほどの作品を選んで『南城三餘集』へ上下^(二)が刊行されている。

南城の詩文については既に内山知也氏の『藍澤南城 詩と人生』^(三)に詳しい解説がある。氏は、南城の詩論を實況説と呼んでいる。その據り所になっているのは、南城の『補漏』^(四)に見える記述である。その『補漏』には「實錄」の作として杜甫の「茅屋爲秋風所破歎」が引かれているが、内山氏は南城と杜甫の關連にまでは觸れていない。また、刊本『南城三餘集』の自序「三餘集抄題言」（以下「題言」と略稱）のあとに「贅言三條」が付されており、南城はその中でも杜甫の詩のことを述べ、「是れ余の折衷の本由^(五)する所なり。」と述べている。「余の折衷」とあるが、「題言」で述べられている内容は簡単に言えば自身の「折衷」の解説なのである。

いったい、杜甫の詩が「折衷」を生み出す由來となっているとはどういうことなのか、また南城にとって杜甫とどのような存在だったのか。江戸期の詩人たちは當然杜甫の影響を受けていたであろうが、それと南城の場合と

では違いが見られるのであろうか。本稿では以上のような問題について考えてみたい。

本論に入る前に、南城がどのような杜詩の版本を使っていたのかについて述べておきたい。柏崎市立図書館には三餘堂の藏書があるが、その中に『杜工部集』（六冊）と和刻本の『鼈頭杜律集解』（十二冊）とが存在する。^(五)今この二書を見ると、『杜律集解』には全く見られないが、『杜工部集』の方には多くの朱の書き入れがある。ただ、管見の限りではその記述に南城のものと断定できる要素はなく、特に南城の杜甫詩理解との関連性は見出せなかった。三餘堂の藏書は南城、朴齋、雲岫^{うんしゅう}と三代續いた學塾の藏書であるから、それが直ちに南城が使ったものとは言えないし、^(六)南城が使ったものが散逸している可能性もある。したがって、以上は参考^(七)に止めるのみである。

二 南城の實況説

(一) 「詩史」と「實録」

南城は『補漏』（卷五）で次のように述べている。

詩ハ實録ヲ主トスヘシ美如^{キモ}「春葩」而非^ニ「實況」モノハ余不^レ取杜ヲ詩史ト稱スルモ實録ナル故ナリ

實録でなければ春の花のように美しい詩であっても自分^(八)は取らないとして、杜甫が實録によつて詩史と呼ばれていることを述べている。そして、杜甫の「實録」の作として七言歌行の「茅屋爲秋風所破歎」（茅屋、秋風の破る所と爲るの歎き）を次のように引用している。

八月秋高風怒號。卷^{シテ}我屋上三重茅。茅飛渡^ヒ江灑^ク江郊^ニ。高者挂^ハ罽^ス長林梢。下者飄轉沉^ム塘坳^ニ。南村羣童欺^キ我老無^ク力。忍能對面爲^ス盜賊^ヲ。公然抱^レ茅入^レ竹去。唇焦口燥呼^テ不^レ得。歸來倚^レ杖自歎息。

俄頃風定雲黑色。秋天漠漠向昏黑。布衾多年冷似鐵。驕兒惡臥踏裏裂。牀頭屋漏無乾處。雨脚如麻未斷絕。自經喪亂少睡眠。長夜沾濕何由徹。安得廣廈千萬間。大庇天下寒士俱歡顏。風雨不動安如山。嗚呼何時眼前突兀見此屋。吾廬獨破受凍死亦足。

確かにこの詩は細部に至る寫實的な描寫が特徴的である。ただ、この詩がよく話題になるのは世の貧しい人を救いたいと述べる杜甫のあらわな感情の表出によつてであり、通常この詩が「詩史」の關連で引かれることはない。「詩史」とは『新唐書』杜甫傳、贊に「善く時事を陳べ、律切精深にして千言に至るも少しも衰へず、世に詩史と號せらる。」とあることから言われる語である。「時事」というのであるから、杜甫が社會的な出來事、事件などを詩の中に詠み込んでいることを指している。南城は當然そのことは知っていたと思われる。それなのに、なぜ一般的に「詩史」の理解とは違うことを述べたのであろうか。南城はさらに續けて次のように言っている。

コレヲ實錄ト云狼些ノ事ニテモ實錄ナレバ記事ニ代テ後ニ傳フベシ徒ニ風月ヲ嘲哢シテ誕漫ナル虚作ヲ事トス
ルモノハ假令文彩ノ觀ツベキアルモ俳諧發句モ同様ナリ何ソ傳ルニ足ランヤ

俗世間の平凡なことであつても實錄ならば記事に代わつて後世に傳える價值を持つが、風月をめめて大げさな修飾をしたものは、たとえ彩りがあつて見榮えがよくても後世に傳える價值をもたないものだと言ふ。

考えてみると、「時事」とは歴史的事實であることに違ひはない。どの程度政治にかかわつてゐるか、あるいは世の人々にどの程度影響をもたらしただかといふことの前に、それは事實でなければならぬ。杜甫は確かに政治的、社會的な事象を詩の題材としているが、その根底には事實に即して描寫するといふ基本的な態度がある。文學の虛構性といふのは反對に、杜甫はほとんど現實の中に入つてゆき、微細なことまで記録する。たとえ無殘なことでも自己の心情に即してありのままに文字に寫してゆく。その結果が家族の困窮や庶民のようすを描くことにつな

がつていると考えられる。さきの詩でも「驕兒惡臥して裏を踏み裂く」や「牀頭屋漏れて乾ける處無し」など、寢そこの悪い子供や雨漏りのために濡れて乾かない寢臺の描寫は、事象自體は取るに足りないことであつても、それが詩のなかでは大きな説得力を持つのは事實に即した表現だからである。だから、杜甫が一人の小役人に過ぎなくとも後世「詩史」と讃えられるのは、實録という方法によつて詩作しているからである。南城が考えたのは以上のようなことなのであろう。

(二) 實況説

内山知也氏はこの南城の詩論を實況説と呼んでいる。氏は「南城は實際の狀況を虚飾しないでありのままに描寫することが最重要であると考え、そういう表現を『實況』『實録』という語で表したのである。」⁽¹⁾と云う。さらに次のように述べている。

南城の〈實況説〉の實踐の跡は、郷土の生活に密接した作品に顯著に表れる。次に掲げる「絳女歎」という長編の七言古詩は、つむぎ織りの仕事に多額の資本をかけ、母親と娘が一冬かかって精魂こめて織りあげ、春になつてやつと完成し、やれ嬉しやと喜んでいるときに、町のちぢみやが品物を買いつけに來、うまくだまされて買いたたかれてしまうことを詠っている。機織りの詳細な過程の敘述と、ちぢみやの詐術的行爲が手にとるように描かれていて、まちがいなく〈實況〉の詩である。この詩は同時に當時の柏崎の縮商人の盛況と、その搾取の下に泣く疲弊した農家の女性たちを刻畫して⁽¹⁾⁽²⁾いる。

内山氏は南城の詩の中でも「絳女の歎き」を特に取り出し、「まちがいなく〈實況〉の詩である」と云う。このことについて少し検討してみたい。南城は「詩は實録を主とすべし」と言つており、詩作の方法としては「主とす

べし」と述べることで「實録」を絶対的な条件とせず、少し柔軟なとらえ方を含ませている。内山氏は「實況」「實録」という語」と述べて両者を並列してとらえているが、南城は「實録」と「實況」との區別を考えているのかもしれない。「實録」は寫實に徹した場合のことで、「實況」は「實録を主」とする詩作の方法のことなのではなからうか。それではこのことを「絺女の歎き」の中身を検討することで考えてみたい。この詩は計六十二句の長編なので引用は部分的になる。その冒頭部分は以下のものである。

絺女歎

絺女の歎き（卷八）

越溪紅女業縹絺

越溪の紅女縹絺を業とす。

羽産良泉價不卑

羽産の良泉價卑しからず。

購之選擇純粹者

之を購して選擇す、純粹の者、

十有五升經緯資

十有五升經緯の資。

筍爪劈來細如釐

しゆんさうざ
筍爪劈き來れば細くして釐のごとし。

朱唇含之指捻之

しゆしん
朱唇之を含み指もて之を捻る。

頭尾接垂邇在椽

頭尾接ぎ垂れ邇りて椽に在り、

績功何問日期遲

績功何ぞ問はん、日期の遲きを。

髮不敢梳爪不剪

髮敢て梳らず、爪剪らず、

拮据晝夜無休時

拮据晝夜休む時無し。

ちぢみ織りの仕事は高價なカラムシが必要で、それを買ってよいものを選び出す。爪で裂いで細くし、口に含んでよっていく。髪はくしけずらず、爪を切ることもない。髪をくしけずると頭の膏で手を汚してしまう。爪を切る

と麻を裂くのに不都合だ。晝も夜も休む時はないなどと歌う。「拮据」は忙しく働くこと、『詩經』の「鷓鴣」、また杜甫の詩にも見える語である。(十三)この引用部分以下にも縮み織りの作業が具體的に描寫され、詩の後半では縮みの買い取り商人が現れる場面となる。

適有買締施施來

たまたま 適と買締の施施として來たる有り、

看稱綺麗即退回

看て綺麗と稱して即ち退き回る。

呼喚何爲不命價

呼喚す、何爲れぞ價を命ぜざる。

高下在心君試猜

かうげ 高下心に在り君試みに猜せよ。

咄咄如此綺麗者

とつとつ 咄咄として此くのごとき綺麗の者、

賣之不售何可齋

之を賣りて售れず、何ぞ齋すべけん。

綺麗だとほめて値段を言わず、すぐに歸ろうとする商人。胸のうちにはあるけれど、あなたに當ててみてほしいなどと思わせぶりに言い、こんなにも綺麗で派手ではねえ、賣ろうにも賣れずもうけは出ないと言う。この後、商人は儉約のお觸れが出ていることを口實に派手な織物は高く賣れないことを言つて立ち去つて行く。この買い取り屋には、實は仲間がいてその後母と娘の所にやつて來る。氣落ちしている母と娘はとうとう賣りたい値段の半額であとから來た縮み屋に賣つてしまふという結末である。

以上、南城は機織りや布晒しのようすを具體的に描寫し、また商人が言葉巧みに縮み織りを安く買い取る狀況もリアルに描かれている。しかし、この詩に歌われた情景は南城が直接目にしたものではない。ある程度自身が目にした材料はあるにしても、この物語を目撃して描いたのではないはずである。つまり、この場合の「實況」は「實錄」ではなく想像による部分が含まれている。また、この詩は敘事詩としての南城の工夫がいくつもあり、それに

よつて作品の面白さが増しているようである。たとえば、前半の母と娘が苦勞して縮みを織り上げる様子を描寫したあとで、ことば巧みな縮み商人を登場させ、さらに母と娘の心内語を盛り込むことなど^(十四)によつてこの詩に起伏をもたらし、その結果騙される母と娘の悲しみが次第に讀者の實感として感情移入されていくという手法である。したがつて、この「絺女の歎き」は「實錄」の精神を基調としつつ、そこに南城の想像と技巧とが加えられた「實況」の作と見るのが適切ではないかと考えられる。

(三) 杜甫の社會詩との比較

「絺女の歎き」は、内山氏が「當時の柏崎の縮商人の盛況と、その搾取の下に泣く疲弊した農家の女性たちを刻畫している」と述べていたように、ひとつの社會詩と見ることができそうである。この作では、世の中が次第に經濟中心の社會へと變動してゆく中で、貧しい者、力の弱い者がますます困窮していくことへの作者の思いが感じられる。しかし、杜甫の社會詩は自己の目を通して主觀的な描寫がなされたり、作者の感情が作品中に表れたりしているのに對して、「絺女の歎き」は客觀的な描寫がなされたり、作者の感情は抑制されており、社會の矛盾や不合理を訴えようとする意圖が表現されているとは思えない。唐末の詩人、皮日休の正樂府十首の一つに「橡媪の歎き」がある。ここには官吏の腐敗が述べられ作者の政治批判が感じられる作品ではあるが、表現は寫實的である^(十五)。もともと樂府體の詩は他人を客觀的に敘するものであつて、作者の感情は詩句に表さないものであつた^(十六)。南城の描き方も従來の樂府體の敘事詩としての傳統を受け繼いでいると感じられる。これは杜甫の七言歌行の詩に見られる感情表出とは大きく異なるものである。

さて、次に示す雜言古詩「大雪の歎き」も雪害に苦しむ農民の姿が詠われていてこれも社會詩と言える作品であ

り、また先の「茅屋、秋風の破る所と爲るの歎き」と表現の上で類似しているところがある。その冒頭をまず示す。

大雪歎 雜言

大雪の歎き(卷五)

紛紛雨綿絮

紛紛として綿絮を雨らし、

漠漠積鹽鹽

漠漠として鹽鹽を積む。

鹽鹽將綿絮

鹽鹽と綿絮と、

晴晴盈四寓

晴晴として四寓に盈てり。

比年大雪後耕耘

比年大雪耕耘後。

山田蕪穢饑荐臻

山田蕪穢し饑を荐りに臻る。

はらはらと綿が降り、廣く鹽が積み重なる。鹽と綿はまっ白く家々の周りに満ちている、とまずは自然の恵みを思わせるような比喻によつて一面の雪が歌われている。そして、毎年の大雪は春の農作業を遅らせ、山間の田地は荒れて雜草が生い茂り、飢饉がやたらにやってくる、と續けて次のように言う。

願將綿絮作厚褥大被

願はくは綿絮を將て厚褥大被を作り、

遍覆普天寒民

遍く普天の寒民を覆はん。

願將鹽鹽斗量車載

願はくは鹽鹽を將て斗量車載して、

遍施四海饑人

遍く四海の饑人に施さん。

綿也絮也似而非

綿や絮や似て非なり。

鹽也鹽也皆不眞

鹽や鹽や皆眞ならず。

ここで南城は、「願はくはせん」の形で寒さや餓えで困窮している人々を救いたいと述べているが、この述べ

方は先の杜甫の「茅屋爲秋風所破歎」の「安くんぞ天下の寒士を庇ひて俱に歎ばしき顔せん」とよく似ている。南城は杜甫の詩句の影響をうけてこのように表現したのかもしれない。しかし、その表現の仕方は、杜甫が自分と「天下の寒士」とが喜びを共にしたいと述べているのに對して、南城はできることなら綿や鹽のような雪によつて萬民を救いたいと述べている。つまり、杜甫の表現は自分と「天下の寒士」とを同等に見た切實感のある願望であるのに對して、南城の方は實現不可能であることを承知した上での願望であり、逆にそれだけ大雪の害が大きいこと、また自身の無力感などを訴えていると言えるだろう。詩はこの後次のように歌われている。

玄天何故降斯物

玄天よ、何の故にか斯の物を降らす。

寒者轉寒貧轉貧

寒者は轉た寒く貧は轉た貧し。

仰天空望黃綿襖

天を仰ぎ空しく望む、黃綿襖。

弊襁結凍竈無薪

弊襁凍を結びて竈に薪無し。

俄聞窮閭嫠婦室

俄に聞く、窮閭嫠婦の室、

棟撓桷折身壓墳

棟撓み桷折れて身壓墳すと。

又聞野行蓑笠客

又聞く、野行蓑笠の客、

一身寒凍死迷津

一身寒凍して迷津に死すと。

嗟斯物之於天壤

嗟斯の物の天壤に於ける、

不唯無益害亦頻

唯だ益無きのみならず害も亦頻なり。

或云是能殺蟄卵

或いは云ふ、是れ能く蟄卵を殺し、

使彼野蝗不敢產

彼の野蝗をして敢て産せざらしむと。

或云是能養泉脈

或いは云ふ、是れ能く泉脈を養ひ、

使我田穉不敢旱

我が田穉でんちをして敢て旱せざらしむと。

兩説糊塗何可取

兩説糊塗にして何ぞ取るべけんや。

偏恐表丈復表沴

偏に恐る、表丈復た沴わざはいを表はさんことを。

唯有寒儒得小利

唯だ寒儒の小利を得る有りて、

山窓夜照蠹殘簡

山窓夜照らす蠹殘簡とごんかん。

「十尺」(三メートル)の大雪を心配するというのは越後の山間地においては誇張ではなく、現實に即した表現である。目崎徳衛氏は「大雪という天災に眞向から怒りを叩きつけた雄編(十七)」とこの詩を評している。南城には雪を題材にした詩は多くあり、確かに「苦雪吟」(卷十)では山民が雪を憎むと述べられ、(十八)「大雪」(卷十一)でも農民が除雪に来てくれないと家が豪雪につぶされてしまうと詠われている(十五)。しかし、それらの描寫の意圖は北國の風土に生きる人々の姿を、「實錄」としてそのままに描くことにあると思われる。南城が雪を題材にした作品にはほかに「書寮雪夜」(卷二)、「殘雪」(卷四・七)などがあって、その場合の雪は地域に生きる生活の風土の一つとして捉えられている。南城は政治にかかわろうとはしていないから、この作で世の人々を救いたいと述べているのは實感ではあつても、それは表現上のことに留まつている。南城は「玄天よ」と述べているが、その心情は天災への「怒り」ではなく雪害の現實をそのまま受け取ることしかできない悲しみと恨みなのであろう。詩の末尾も自身の儒者としての生活におけるわずかな雪の恩恵を述べて終わっているが、これも大雪の中にあつてあきらめに近い作者の平靜さを感じさせる。したがつて、この詩に「天災に眞向から怒りを叩きつけた」という力強さは感じられず、この詩には別の評價が考えられてしかるべきである。

以上、南城の二編の詩について杜甫の社會詩との比較を考えてみた。「絳女歎」「大雪歎」は二編とも南城個人のことではなく、地域社會での弱者の悲しみや農民の苦勞を描いている。そこに作者の思いは當然あるはずだが、南城が「歎」の形式を選んだということはそこにまず自分の感情は抑制しようという意識が働いていると考えられる。これもまた實況を作詩の基本的方針としていることの結果なのであつて、同じ社會詩とはいつても南城が杜甫の影響を受けているとは言えないと考えられる。

三 杜甫の詩と南城の「折衷」

(一) 「贅言」での杜甫への言及

『南城三餘集』の「贅言三條」、その「一」に次のような言葉がある。

老杜五七言、兼備古今之風。其高出入于漢魏者有之。其卑爲晚唐宋元之首唱者有之。蘇東坡陸放翁、亦能體此意。一高一卑、隨其宜、縱橫有之。是餘折衷所本由。折衷也者時措之宜也。

(老杜の五七言、古今の風を兼ね備ふ。其の高き漢魏に出入する者之有り。其の卑き晚唐宋元的首唱たる者之有り。蘇東坡陸放翁、亦能く此の意を體す。一高一卑、其の宜しきに隨ひて、縱橫之有り。是れ余が折衷の本^{ほん}由^{よし}する所にして、折衷なる者は時措の宜しきなり。)

杜甫の五言七言の詩は、古今の風を兼備しており、高雅な趣は漢魏の風に似ているところがあり、平俗な趣のところは晚唐や宋元の先驅けとなつているところもある。蘇東坡と陸游も杜甫と同じようにこの趣を實踐している。高雅や平俗は、適切な描寫に従つてさまざまに現れる。これが折衷の由來であつて、折衷とはその時々において最

も自分の氣持ちになつたものを選ぶことであると言う。

杜甫の詩が「古今の風を兼ね備」たものであることについては、『新唐書』杜甫傳の贊に述べられている。南城の言葉は當然そのことを踏まえている。また、「時措」は、『禮記』中庸篇に「時措之宜也」と見え、鄭注では「時措、言得其時而用也。」（時措は其の時を得て用ふるを言ふなり。）と言う。

ここで南城は、杜甫、並びに蘇東坡や陸游などの大家の詩作が元になつて「折衷」が確立されたこと言い、「折衷」は對象を描こうとする自分の氣持ちにびつたりとかなつた適切な描寫をすることだと述べている。しかし、「折衷」という語は詩文においては、一般に各詩風のよいところを取り入れて自己の詩作に活かしていくことを言うものであつて、南城の「折衷」とは違がある。南城が述べている「折衷」とはいつたどのようなようにして形成されたものなのであろうか。以下には「題言」で南城が述べていることを見てゆきたい。

(二) 「矯弊の流」の弊害

「題言」では、南城が詩作の方法を模索したことや「折衷」に行き着いた経過が述べられている。南城は自分が若かつた頃の、江戸後期の狀況と自身の様子を次のように述べている。

吾少也、模擬古風猶行于世。既而漸移于清新。吾亦唯逐時好。久之、覺矯弊之流墮于一偏、從事折衷、有年于茲矣。

(吾少きや、模擬古風、猶ほ世に行はる。既にして漸く清新に移る。吾も亦唯だ時好を逐ふ。久しくして、矯弊の流一偏に墮するを覺り、折衷に従事すること、茲に年有り。)

前代の弊害を改めて自分たちの詩風を形成するやり方が、「矯弊の流」である。それに對して、南城は、弊害を

改めようとすれば必ず勢いのあまり一點を強調してしまつて偏りが出てしまふことを指摘する。

故古雅也、清新也、一廢一起、有時乎王、有時乎輿擡、暫可以矯當時之弊、非作文規矩之常也。於是調停家兼用古與新、而執其中、無偏無黨、渾化于形迹之外、以爲得折衷之法者有之。然是所謂執中無權、與偏見何擇焉。(故に古雅や、清新や、一廢一起し、時有りてか王、時有りてか輿擡、暫く以て當時の弊を矯むべくも、作文規矩の常に非ざるなり。是に於いて調停家古と新とを兼用して、其の中を執り、偏無く黨無く、形迹の外に渾化して、以て折衷の法を得たりと爲す者之有り。然れども是れ所謂中を執りて權無し。偏見と何ぞ擇ばん。)

江戸期には荻生徂徠を中心とした古文辭派の詩人たちによる格調説、つまり「古雅」から、山本北山らの主張する性靈説、つまり「清新」への變遷があつた。南城は格調説も性靈説も詩文を書く際の規範にはなりえない、「調停家」が言うような二つのよいところをとり、兩方を兼用してその中をとると言うやり方も偏見と同じであると言(二十一)う。

(三) 「折衷」の内容

そして、南城は自身の「折衷」を次のように説明する。

其趣其調、因物有移易齟齬 亦唯其當之爲尚矣。是之謂折衷也。衷也者適宜之謂、非執古今之中也。

(其の趣其の調べ、物に因りて移易齟齬有り。亦唯だ其の之に當れるを尚しと爲す。是を之折衷と謂ふなり。衷なる者は宜しきに適ふの謂にして、古今の中を執るに非ざるなり。)

趣や調べは表現する對象によつてさまざまに變わる、趣や調べが充分に自分の氣持ちになつたものであるかを大切に考える、それが折衷であつて「衷」というのは自分の選んだものが適切であることを言うのであり、古今

の中をとるなどということではない、との主張である。「衷なる者は宜しきに適ふの謂」とあるが、たとえば『左傳』僖公二十四年に「服之不衷、身之災也。」（服の衷はざるは、身の災なり。）とあり、杜預注は「衷、猶適也」であり、陸徳明の『經典釋文』もその「衷」について「音忠、適也」とする。

南城は郷里で三餘堂を開く以前に江戸で葛山葵岡くすやまきこうに學んで（二十七）いる。葵岡は片山兼山の弟子である。葵岡の著に『論語一貫』があるが、これは兼山の説をまとめたものである。その序で葵岡は「博考經傳、以折其衷」（博く經傳を考へ、以て其の衷を折む）と述べている。南城の「折衷」は、この葵岡の考え方を受け継いだものと考えられる。以上、「題言」の記述を見てきた。これによつて「余が折衷の本由ほんゆする所にして、折衷なる者は時措の宜しきなり。」の言葉が了解される。南城が詩作を續ける中で考えていたのは、時代が變わり流行が變つても變化することのない詩文制作の規範はないのだろうかということであつた。その探求の過程で大きな參考となつたのが「古今の風を兼ね備」た杜甫の詩であり、これを規範として、南城はその時々において自分の氣持ちになつた表現をすることを最も重視する「折衷」にたどり着いたのである。ただ、南城が「折衷」を確立するに當つては、經學における兼山、葵岡の學問がもとの土臺になつていたのである。

（四）江戸期における位置づけ

以上が南城の詩の「折衷」に關することであるが、それではこの「折衷」は江戸期においてどのような位置づけになるのであろう。

松下忠著『江戸時代の詩風詩論』では、「詩論の折衷化と折衷説の成立に關する見解（二七三）」がまとめられている。その折衷化とは「論争を止揚して、自己の詩論に他の詩論の長所を加（二七四）上し、自説を完成せる態度」で、例えば「神韻

説を中心として他を折衷」したり、「格調説を中心として、神韻説を加上して自説を唱え」る、などのことである。(二十四)
そして、著者は山陽や茶山は「格調説・性靈説・神韻説を打ち捨てた」として、それらの主張を引用して示している。(二十五)
しかし、その引用を見ても「折衷」の語は誰も使っていない。つまり、「折衷説」とは言っても、それはあくまで折衷化の態度のことである。それに對して、南城は明確に詩論としての「折衷」を述べている。したがって、これはそれまでの江戸期において見られなかった主張である。

四 南城の詩作と杜甫

(一) 南城の詩

さて、以下には紙数の許す限り南城の詩を見ていきたい。最初は律詩である。

對落花書感

狂風狼藉落花林

叱紫咤紅何可禁

邯鄲枕驚春夢短

蓬萊路隔曉雲深

人因惓惓頭添白

鳥作緝蠻聲未瘖

畢竟雖無桃李笑

落花に對して感を書す（卷十）

狂風狼藉たり、落花の林。

叱紫咤紅、何ぞ禁ずべけん。

邯鄲枕驚きて春夢短く、

蓬萊路隔てて曉雲深し。

人は惓惓に因りて頭白を添へ、

鳥は緝蠻を作して聲未だ瘖せず。

畢竟桃李の笑無しと雖も、

簾間獨起尚聽禽 簾間獨り起きて尚ほ禽を聽く。

(脚韻平聲十二侵、林・禁・深・瘖・禽)

落花の嘆きのこと寄せて、樂しく華やかなことがなくても孤獨に耐えて生きていくほかない己の生の營みを靜かに見つめた作である。

頷聯の對句は、成語の「邯鄲の夢」を想起させる「邯鄲」枕」と、仙境の世界の像を抱かせる「蓬萊」路」とを對比させている。頸聯においては、「惺惺」と「緝蠻」とは雙聲の語で對應しており、共に典故がある。「惺惺」は、『荀子』禮論篇に「惺惺而無時至焉。」(惺惺^{いふあ}して時に至る無きこと能はず。)とあり、楊倞注に「惺は變なり。詭は異なり。皆變異感動の貌なり」とある。『荀子』のこの條は、「喪」や「祭」に關して述べられている箇所である。南城はこの詩の成立以前に妻や子を亡くしている。その悲しみがこの句の背景にあると思われる。『緝蠻』は、『詩經』に「緝蠻黃鳥、止于丘阿。」(綿蠻^{二十}たる黃鳥は、丘阿に止まる。)とあり、「緝蠻は、鳥の聲。」と『詩集傳』にある。

作詩における典故という點で考えてみると、南城は杜甫の典故が多いとは言えない。刊本『南城三餘集』の頭注は、主に作品の典故を示しているが、その中で杜甫の典故が示されているのは二例しかない。頭注で示される典故が多いのは詩人の句ではなく、『左傳』や『荀子』『禮記』『文選』などであって、その他種々雑多な古典籍が頭注には數多く示されている。これは南城の儒者としての特徴を示すものであり、一つの詩風や特定の描寫の仕方にとだわらず、題材に応じて柔軟に用語を考えたということにも關係があるのかもしれない。次は絶句で、疊語の使い方が珍しいと思われる例である。

早春講堂聽禽語

早春の講堂に禽語を聽く(卷二)

院外風輕枝不鳴

院外風輕くして枝鳴かず、

屋烏鶯雀賀春聲

屋烏、鶯雀、春を賀する聲。

舜舜相呼還禹禹

舜舜相呼び還た禹禹、

林禽亦識聖人名

林禽も亦識る、聖人の名。

(脚韻平聲八庚、鳴・聲・名)

「講堂」とあつて、春の三餘堂の一コマを歌っていることが分かる。實況の詩である。刊本『南城三餘集』の頭に「舜舜は雀の聲なり」、「禹禹は、烏の聲なり」とある。疊語を鳥の鳴き聲の擬音語として用いるのは『詩經』の時代から見られるもので珍しくはないが、この詩の場合、擬音語と同時に「鳥も聖人の名前を知っている。」と結んでいるところに工夫が見られる。これはおそらく独自の工夫なのであろう。

杜甫は詩作において革新的な試みを行っていると言われる。たとえば、「兵車行」における「耶孃」や「鄭廣文」に陪して何將軍の山林に遊ぶ」の第六首における「裝綿」など、詩における俗語の使用である。「裝綿」は六如が「宕山の夏日」の中で「是處裝綿度旦昏」(是の處、綿を装ひて旦昏を度る)と使っている(二六八)。だが、南城には六如がような例は見られない。次の詩は夜明けの情景を神秘的に描いた五言八韻の排律の作品である。

花霧(卷一)

靄靄殘星落

靄靄あいあいとして殘星落ち、

冥冥曙色通

冥冥として曙色通ず。

杏邨斜曳白

杏邨斜めに白を曳き、

桃塢迴籠紅

桃塢たう迴かに紅を籠む。

雲母重屏外

雲母重屏の外、

青綾步障中

青綾步障の中。

仙姫眠未足

仙姫眠り未だ足らず、

神女夢應同

神女、夢、應に同じかるべし。

霑似添春露

霑ほすこと春露を添ふる似く、

圍如護曉風

圍むこと曉風を護するがごとし。

養花成露霖

花を養ひて露霖を成し、

輝日學蛺蝶

日に輝きて蛺蝶を學ぶ。

忽使啼鶯啜

忽ち啼鶯をして啜せしめ、

又令狂蝶矇

又狂蝶をして矇せしむ。

朝陽蒸不盡

朝陽蒸し盡くさず、

五里入瞳矇

五里入瞳矇に入る。

(脚韻平聲一東、通・紅・中・同・風・蝶・矇・瞳)

「花霧」とは花がすみ。制約されることのない一句二句も對句にしている。月光のうす明かりと殘星の描寫から始まり、「杏邨」と「桃塢」、「雲母」と「青綾」、「仙姫」と「神女」など艶麗な語による對句を連ね、後半も豊かな自然の恵みを夢幻的な趣の中に描出しようとしている。「露霖」と「蛺蝶」はともに雙聲の語で對應している。

「露霖」は小雨の意で、『詩經』小雅、信南山」に典故がある。(二十九)

吉川幸次郎氏は、「鄭駙馬の池臺にて、鄭廣文に遇ひて同じく飲むことを喜ぶ」の詩について述べる中で、排律

について「遊戯に流れやすいこの詩形は、杜甫にとつても、これまでは社交のための詩を作るものとして、軽くもてあそばされて来た。しかし今や杜甫は、この詩形に眞剣な心情をもちこんでいる。」^{三十一}と述べている。南城は實感を尊ぶ立場であるからこのような寫實とは異なる作品は異色であり、遊戯的な趣が感じられなくもない。だが、南城の主張に即して考えるならば、この詩は、ある日の夜明け方たまたま目にした光景に觸發されて、興が乘るままに作つたもののではないかと考えられる。自身の實感の上ではこれもまた「實況」なのだということであろうか。次の詩には動物や娘のことが述べられている。

春晝（卷八）

午庭風死嬾遊絲

午庭風死して遊^い絲嬾し。

片片花飛殊可疑

片片たる花飛ぶ、殊に疑ふべし。

家狸伴眠桃李下

家狸^{かり}伴り眠る、桃李の下、

躡身搏雀觸枝時

身を躡して雀を搏ち枝に觸るる時。

（脚韻平聲四支、絲・疑・時）

春夜（卷八）

花擁學寮隴晚庭

花、學寮を擁して晚庭に隴たり。

書燈未上月初更

書燈未だ上さず、月初更。

誰吟一刻千金句

誰か吟ず、一刻千金の句、

細細闌窓少女聲

細細たり、闌窓少女の聲。

（脚韻平聲八庚、更・聲）

この二首は刊本『南城三餘集』では「春莊雜詠」と題してまとめられている。これも三餘堂での日常の一場面を描寫した實況の詩である。「遊絲」^{いゆうし}以外は比較的平易な語を使っている。一首めは、風のない晝間、花びらがなぜひらひらと舞い散るのかと不思議に思っていたところ、眠ったふりをしていた猫が雀を捕ろうとして木の枝に觸つたのだったという内容。二首めの「少女」は、南城の娘の佐知かと思われるが、蘇軾の「春宵一刻直千金」の句を吟じていたという詩。南城が家族を詩に歌うことはあまりない。ここでも「少女」とあるだけで家族とはすぐは分らない。南城の創意は家族を題材にすることにあるのではなく、三餘堂の靜かな春宵を、花と少女と蘇軾の名句とを配して形象豊かに描くことにある。杜甫の場合は小動物にしても家族にしても、描き方が詳細でまさに寫實である。したがって、南城はこうした面においても杜甫の影響を受けているとは言えない。身近なことを題材にすることは多いが、それは杜甫の影響というよりも、當時の詩壇で當たり前のように行われていた宋詩風の詩作によるものだとも言えるし、南城の實生活の中で實況の詩を作ろうとすると、結局題材を身邊の事柄に求めることになるという見方もできる。次の詩もやはり身近な題材を詠んでおり、宋詩風と感ぜられる詩である。

蕎麥麵（卷七）

山夫打蕎手

山夫、打蕎^{だげう}の手、

妙勝麵舖翁

妙なること麵舖の翁に勝れり。

箸箸垂三尺

箸^まに箸^まひて垂ること三尺、

尾猶蟠碗中

尾は猶ほ碗中に蟠まる。

（脚韻平聲一東、翁・中）

後半の二句は、描寫する價值もないと思われる事柄をそのままに描き、讀めば必ず讀者の腦裏に蕎麥の像が思い

浮かんでくるといふ實況である。日常のささいな事物を取り上げた詩は、たとえば「踏爐こたつ」や「弱魚いいわの歌」など南城にはこれに類するものは多くある。

以上わずかながら南城の詩を見てきた。南城には用語が難しいものもあるし平易なものもある。また、「其の趣其の調べ、物に困りて移易いへきく鬪む蓄たく有り」との主張のとおり趣や調べも様々で、それは詩の題材や主題に従って變えていふようである。それは、杜甫との関連で言えば「古今の風を兼ね備ふ」ということになる。しかし、杜詩を典故として用いることや詩の技法や題材、表現方法などを杜詩から模倣して取り入れることなどにおいては、南城において顕著な傾向は見られないのである。

(二) 江戸後期の詩人と南城

身近な日常生活の中から詩の題材を見つけることや實景を歌うという詩の傾向は、既に南城以前の詩人たちに見られた傾向である。

富士川英郎氏は、六如上人によつて安永天明頃の寫實主義を基調とした詩風は大膽に新しい道を切り開かれたとし、さらにそれは菅茶山の出現によつて、いつそう幅と深みと増し、情景を兼ねそなえた渾然たる境地にまで大成された、と言いう。また、氏は菅茶山について述べながら「茶山と六如において共通のことと言いえば、先ず宋詩を尊ぶことと、詩材を身近かな日常生活のなかに求めて、實景を寫し、實感を歌うことなどが擧げられる。」と述べている。南城は十五歳の頃江戸に出て、二十七歳まで葛山葵岡のもとで學んでゐる。南城は江戸にいて、六如や茶山など多くの詩人の作品を充分に讀みこんだことであろう。菊池五山の『五山堂詩話』卷一は文化四年に出版され、以後、卷十まで一年に一巻ずつ出版されたといいうが、文化四年は南城十六歳にあたる。南城は詩壇の様子を見なが

ら若い時代の十年以上を江戸で過ごしたのである。

また、六如と菅茶山については、黒川洋一氏が、六如と菅茶山の詩を尊重したこと、特に六如の詩について杜甫の詩を下敷きにしたものが多いことを詳細に述べ、「六如がもつとも多くの影響を受けたのは、宋詩ではなく杜詩からであったことは間違いないところである。」と述べている。三十四南城も杜甫に對する尊敬という點では程度の差はあるだろうが、六如や菅茶山と同様であろう。しかし、杜甫の詩を自分の詩作にどう活かすかという點においては違いがある。詩の制作にあたって、前代の作品の表現を典故として用いるのは古來からの詩人も行つてきたことである。しかし、南城はそのような形としてではなく、もっぱら杜甫の寫實を見習ひ、杜詩が「古今の風を兼ね備」え、「一高一卑、其の宜しきに隨ひて、縱横之有り。」との點を取り入れている。單に用語を自分の詩に取り入れたり、表現方法において發想の仕方を見習ふことは違つているのである。

五 結論

以上見てきたところによつて本稿の結論をまとめておきたい。

藍澤南城は杜甫が詩史と呼ばれるのは實録によつてであると述べているが、それは政治的、社會的な事象であれ身近な題材であれ、その根底には事實に基づいて描寫するという態度が杜甫にあるからだと思われる。南城の詩論は「實況説」と呼ぶことができるが、「實況」とは實録の精神を基調とした詩作のことであると考えられる。詩の題材は日常の平凡な事柄であつても歴史を記録することにもつながつてゐる、詩は事實に基づくからこそ後世に傳える價值が出てくるものであり、自己の體驗でないものを描くときにも事實に即して詩の技巧を用いるべきである。

と南城は考えている。

南城は若かった時代に詩作を続けながら、前代の弊害を改めて新しい詩風を形成するやり方は詩文制作の規範とはなりえず、時代が変わっても變化することのない規範はないのだからかと考えていた。その後、杜甫の詩は古今の風を兼備しており、高雅な趣も平俗な趣もあり、漢魏の風もあれば晩唐や宋元の風に似ているところもあると考えたことが、南城の「折衷」の由來となった。「折衷」とはその時々題材において最も自分の氣持ちに合った適切な表現を選ぶことである。このような「折衷」はそれまでの江戸期にあった「折衷」とは異なるもので、南城は初めて「折衷」を詩作の在り方として明確に主張したと言える。

南城における杜甫の影響は、江戸後期の他の詩人に見られるような傾向とは違いがある。南城は特に杜詩を典故として用いようとはしていない。南城が多く典故とするのは特定の詩人ではなく經書を中心とした古典籍であり、その點儒者の詩作という趣を感じさせる。南城が杜甫を見習っているのは、さまざま詩風を感じさせる自由な表現方法と對象を丁寧に描く寫實性である。ただし、以上のような南城の詩作の傾向は杜甫の影響ということばかりではなく、南城以前の江戸期の詩人たちの詩作も参考になっていると考えられる。南城が江戸期の詩人たちについてどう考え、どのような影響を受けていたのか。それについての検討は本稿では不十分であり、細かな説明は今後に残される課題である。

〔付記〕 引用文の表記について

南城の『三餘集』や『三餘集抄題言』、『補漏』では、本文に返り點送り假名が施されているが、現代の訓讀と合わない部分もあるので本稿では本文のみ示した。ただし、杜甫の作品については南城の讀み方を記すことが重要だ

と考えられるので原本のまま表記した。

注

- (一) 新潟縣立圖書館藏。全一七卷、一六冊。自筆稿本。内題は卷一、卷二、卷九、卷十六が「南城山人三餘集」、卷二は「南城山人三餘雜詠」、卷十、十四は「南城三餘集」卷十五は「南城三餘草」と記す。卷十七は内題はなく、すぐに詩から始まっている。全十七巻の作品収録数は、渡邊秀英氏によれば散文百二編、韻文一八四四編で、總數一九四六編である（『藍澤南城』新潟縣高等學校教育研究會國語部會『國語研究』1號）。
- (二) 内題は「三餘集抄」となっている。下巻末に「安政三丙辰之年。十一月朔。藍澤祇手^ニ錄于南城山窓下^ニ」^ニとあるのみで奥附はなく、刊行年については分からない。散文はなく、詩のみ上下巻全體で二六三首を載せている。基本的に上巻は古詩を載せ、下巻はその他の詩型のものを載せている。
- (三) 『藍澤南城 詩と人生』は東洋書院・一九九四年發行。その六二頁に「南城の詩文」の項がある。
- (四) 新潟縣立圖書館藏。全十二卷。「南城山人三友齋藍澤祇手錄」と記す。一、二巻は缺。その巻五。
- (五) 『杜工部集』は見返しに「季滄葦先生校閱 錢牧齋先生箋註杜工部集 靜志堂藏版」とある。清初の錢謙益の『杜詩箋注』である。『鼈頭杜律集解』は巻末に「元祿九年龍集丙子季秋穀旦 神雜書肆美濃屋彦衛粹」とある。江戸時代に盛行した明の邵傅^{トウフ}の『杜律集解』の和刻本である。
- (六) 注の(七)を参照。
- (七) この詩の本文を三餘堂藏書の『杜工部集』と比較してみると、「牀頭」は『杜工部集』では「床床」に作っている。諸本には「牀頭」に作るものもある（『杜詩詳註卷之十』では「牀頭」に作り、「一に床床に作る」

とある。そうすると、南城が見たのはこの『杜工部集』ではない可能性が高まる。ただ、「雲黑色」の「黒」は三餘堂藏書の『杜工部集』は「墨」に作っている。『杜詩詳註』や『杜詩鏡銓』を見ても「墨」に作っていて異同の注もない。とすれば、これは單に南城が「墨」を「黒」に書き誤ったものかもしれない。

(八) 吉川幸次郎著『中國文學史』(岩波書店・一九七四年發行)。その一六九頁に「この詩の終わりの四句は、大へん激烈である。こうしたことは、從來の詩では氣はずかしくて歌われなかつたものである。」とある。

(九) 「善陳時事、律切精深至千言不少衰、世號詩史。」

(十) 孟^{もうけい}榮の『本事詩』にも杜甫の詩について「當時、號して詩史と爲す」とあるが、「詩史」が杜詩を評する語として一般化するのには、『新唐書』杜甫傳からであるという(『唐代の詩人―その傳記』大修館書店、昭和五十年發行、二四二頁)。

(十一) 内山氏前掲書、六五頁

(十二) 内山氏前掲書、六六頁。

(十三) 『詩經』(幽風)は「豫手拈据」(豫が手は拈据す)と見え、杜甫は「秋日荆南、送石首薛明府辭滿告別、報寄薛尚書、頌德敘懷、斐然之作三十韻」の詩に「文物陪巡狩、親賢病拈据」(文物巡狩に陪し、親賢拈据に病む。)とある。

(十四) 目崎徳衛著『南城三餘集私抄』(小澤書店・一九九四年發行)二〇一、二〇二頁に「檢政自有尊卑等 細絺何裁貴裙」(檢政自ら尊卑の等有り 細絺何ぞ貴裙を裁せざる)について「工女のぼやき」と注している。確かにこの二句は實際に發せられた言葉として表現されたものではない。

(十五) 『唐樂府詩譯析』(胡漢生編著・北京大學出版社・一九九七年、第一版)三三六頁にも「全詩語言樸素、用

事實講話、讀來自然生動。」とある。

(十六) 鈴木虎雄著『杜甫全詩集』第一卷「杜少陵詩總說一五五頁に、樂府體の詩について「これは他人の行事状態を客觀的に敘するを主とし、作者悲喜の情を言辭に表さざるを通例とす。(固より裏面には作者の情あり得べし)」とある。「續國譯漢文大成」(日本圖書センター、昭和五十三年發行)

(十七) 目崎氏前掲書、七八頁。

(十八) 「故山民惡雪甚於毒蛇惡獸 疾首蹙頰如遇阨災」(故山民、雪を惡むこと毒蛇惡獸より甚しく、疾首蹙頰、阨災に遇ふがごとし)

(十九) 「雪埋茅棟屋將崩 偏恐鋤徒不救應」(雪は茅棟を埋め屋將に崩れんとす。偏へに恐る、鋤徒の不救應せざらんことを)

(二十) 「至甫、渾涵茫茫、千彙萬狀、兼古今而有之。」(甫に至り、渾涵茫茫、千彙萬狀、古今を兼ねて之有り。) また、これ以前に、元稹の「唐の故の工部員外郎杜君の墓係銘竝びに序」に杜甫の詩について「盡得古今之體勢、而兼昔人之所獨專矣。」(盡く古今の體勢を得て、昔人の獨り専らにする所を兼ね。)とあり、『舊唐書』もそれに據っている。

(二十一) この「調停家」とは廣瀬淡窓ではないかと思われる。淡窓は「弊風を矯めんと」することを「一偏の説」になつてしまうと批判して、「抑々正徳享保ノ詩ハ。格調アリテ性情ナク。天明以後ノ詩ハ。性情ヲ主トシテ格調ヲ廢セズ。二ツノモノ、中ヲ取ルナリ。」と言ひ、南城が「調停家」の主張として引いたものとは同じである。以上引用は『淡窓全集』中卷『淡窓詩話』(日田郡教育會・一九二六年發行)所

收。)によっているが、『淡窓詩話』は明治期の出版であり、南城が見たものは別のテキストということになる。

(二十二) 南城は十五歳の頃江戸に出て、二十七歳まで葛山葵岡の青蘿館せいらかんで學んでいる。

(二十三) 『江戸時代の詩風詩論』は明治書院、昭和四十四年發行。その一二九頁。

(二十四) 松下氏前掲書、一三三頁。

(二十五) 松下氏前掲書、一三四、一三三四頁。

(二十六) 「簾間獨起尚聽禽」のあとに割注として「李商隱句云、鳥啼花又笑、畢竟是誰春。是其喪婦後之作也」

(李商隱の句に云ふ、鳥啼き花又笑ふ、畢竟是れ誰の春ぞと。是れ其の婦を喪へる後の作なり)とある。頭注にも「簾間獨起人、李商隱句」と書き入れがある。この詩の題名は「早起」である。

(二十七) これは南城の養子で三餘堂を受け継いだ朴齋がつけたものである。朴齋の跋文に「…標釋之、使未至中地位者、知典故所本由焉。」(…之を標釋し、未だ中の地位に至らざる者をして、典故の本由する所を知らしむ。)とある。

(二十八) 黒川洋一注『菅茶山 六如』江戸詩人選集 第四卷、岩波書店、一九九〇年發行。一三三五、一三三六頁參照。

(二十九) 「上天同雲 雨雪雰雰 益之以霡霖」(上天雲あつま同り 雪を雨らすこと雰雰たり 之を益すに霡霖を以てす…)。

(三十) 「杜甫と鄭虔」全集十二卷 四一四頁。

(三十一) 『江戸後期の詩人たち』(平凡社、東洋文庫、二〇一二年發行)、その三三三頁。

- (三十二) 富士川氏前掲書、三十四頁。
- (三十三) 揖斐高著『江戸の詩壇ジャーナリズム』平成十三年發行。角川書店。その二四、四二頁。
- (三十四) 「江戸後期における杜詩の享受——六如上人を中心にして——」(『東方學』第七十九輯。一九九〇年發行)。